

十一月四日

八時頃起床。娘の所有物であろう床に転がっていた文芸別冊

「ナンシー関」読む。TVのコメディイその他、もう視なくなつた世界の事が少し解る。良く知らないが、この人は四十直前で死んだらしいが、長く生きたら辛かつたろう。しかし初めて知つたナンシー関が四十前で死んでしまう状況を作つたのも良く事情は知らぬがTVであり、TVが母体になつている若者達なんだろう。その若い世代、TVの子機みたいな人々が建築にも続々と侵入してきている。それが、今なんだろう。十二時過大学。製図個人指導の後修士論文ゼミ。十六時TVプロダクション来、コンバージョンの件。昨夜来東京の李祖原と上海スタジオGに関して最終打合わせ。市根井邸の報告松本より聞く。うまく出来上がる事を祈っている。厚生館仲々難題を抱えているが、これもくぐり抜けて欲しい。二〇時 若松社長にTEL元氣そうで二十一時会う事になつた。今朝はアクシデントみたいにナンシー関なる本を読んできました。要するにTVメディアのある種の様式論だ。建築と言おうと居る世界に居て良かったと考える。都市のかなしみで鈴木が言おうとしている事は、建築の、都市のどうにもならぬ重さ鈍重さと深い密度の所在なのだ。メディア論、情報論は今、来るべき時代の道しるべを構成しているような錯覚に我々も落ち入り易い。が、建築のどうにもならぬ鈍重さによって構築されてきた文化の密度は捨てたものでは決してない。その、圧縮された闇を超え壁

や床や屋根にまで形を成してしまふ事実、町になり都市になつてしまふドキュメントを鈴木は歴史として把握しようとしているのだ。情報はその闇、その重力を持たない。それ故、軽やかで自由に視える事もある。隣の芝生はいつも緑に視え易い。建築という重さから逃れる努力は、別の言い方をすればその重力が持たらず闇を直視する事ではあるまいか。四〇才前に亡くなつたというナンシー関の本から逆に情報・メディアの不可能性といった事を教えられた。一度も会つた事のないナンシーさんにサンキュー。二十一時過原宿で 社長若松氏と会食。来年株式市場だそうで、来年は変身の年にするそうだ。ロシアに度々出掛けているらしく、ロシアのビジネスの桁外れの解放区振りの話を聞く。若い頃東ドイツで一旗揚げてやろうと一念発起した人らしく、今、ロシアに単身乗り込んで商売を開拓しようとするところが面白く独特だ。アッケラカンと明るい話し振りに来年は私もモスクワに行つてみようかの気になつた。前向きと言うよりも若松さんはジツとしていない人だ。資本はジツと不動のままでは死に体同然なのだから、常に流動させていなくてはならないのをこの人は地दैいつているな。どうなる事やら知れぬところもあるが、若松社長の商売振りには楽しみに見守る事にしよう。来年は上海Gスタジオにも投資してもらつ事になつた。二十三時終了。若松氏は明日午後よりロシアへ。二十四時世田谷村。